

優秀賞
(学生部門)

至純の心に連なり 現代を生きる

小野寺 崇良
20歳

立命館大学 法学部2年



終戦から70年が経った現代日本において、大東亜戦争のことが語られるとき、一番誤解を受けているのは間違いなく特攻隊であろう。今や特攻隊は「軍国主義の被害者」などと、当時の先人たちの心を踏みにじる評価ばかりが投げつけられている。私は今年成人を迎えた。私は、この節目の年齢を迎える一年で、本当の意味で「特攻」というものと出会い、大きく向き合う経験をした。

「特攻」への出会い

大日本帝国軍における「特攻隊」と言えば、航空機特攻を思い浮かべる方が多い。日本軍における最初の特攻隊は、フィリピンのマバラカット飛行場から飛び立った、関行雄大尉率いる敷島隊である。私は昨年の9月、仲間とともにフィリピンのマバラカット飛行場跡に行く機会を得た。そもそも何故マバラカットへ行こうと考えたのか。それは単に特攻隊のことを知るためだけではなかった。現地の画家ダニエル・デイソン氏が飛行場跡に特攻隊の慰霊碑を建立しているということを知ったことからはなかった。子供のころ、基地の近くに住んでいたデイソン氏は、特攻隊の方々と触れ合った経験から、戦後再びフィリピンに入ってきたア

メリカによる「特攻隊は酒や菓漬けにされ、コックピットに縛り付けられて出撃した」などという喧伝に違和感を覚え、特攻隊の業績を調べ、その慰霊のために慰霊碑を建立していると知ったのだ。慰霊碑があるのならば、ぜひそこへ行き、現地にて慰霊祭を行おうと企画したことに始まる。

その碑は戦後、米軍のクラーク空軍基地として使用された敷地内であった。道路がひたすら一直線に走る広大な敷地の中で、一見すると見落としてそうな小さな看板が目印で、その脇道を車で走ると、急に開けた芝生の広場が出てくる。そこに碑があった。

「第一次世界大戦に於て日本神風特別攻撃隊が最初に飛立った飛行場」と大きく日本語で書かれた、あの小さな案内看板からは想像もつかない大きな碑であった。碑の左側にはフィリピン国旗と英語の銘文、右側には旭日旗と日本語の銘文があった。日本語、英語両方の言語で書かれたその言葉の中にこういった一文があった。

「カミカゼ特攻は全ての世界史の記録に例のない壮挙であり又歴史のあきらかにするところにとればその背後にあった理念はまさに凡ての国が相互尊重と機会均等の原則に従って共存共栄を偕にする世界の秩序と平和の確立をひたむきに願ひその実現のために散華したことです」

今の日本ですら、特攻隊に対してこのように敬意を持ってくれる方がそう多くない。戦後70年が経った現在まで碑をまもり、慰霊を続けてくれる異国の方の想いに強く胸を打たれた。

実は、それまで私は沖縄など日本の「戦地」というものに行ったことがなかった。海外に行くことも今回が初めてであった。読んだり、聞くことはあっても、実際の体験はなかった私にとって、このフィリピンの地が初めて噛みしめた「大東亜戦争」であり、「特攻」であった。

慰霊祭を行ったその日は、非常に気持ちのよいまっさらな快晴。その空を眺め、「彼らは、この空に飛んでいったのか」と強く、感動とも感謝とも悲哀ともつかない、深く複雑で、しかしどこかすっきりとした思いが私の心に強くこみ上げたことが今でも忘れられない。

これが、私にとってはじめての「特攻」との出会いであった。

英霊の思いと日本人

特攻隊の方々が、今の自分だけでなく、将来を生きる我々にも深い想いを持たれていたことに関するエピソードとして、西田高光中尉の言葉が有名である。西田中尉は大分師範学校を出て19歳にして国民学校の教師を勤めていた優秀な人物である。日本が確実に敗戦へと一歩ずつ傾く昭和20年5月、郷里の教え子たちへ最後の手紙の返事を書いていた西田中尉。ある記者が中尉に対し「この戦を果たして勝ち抜けれると思ってるのか？負けても悔いはないのか？今日の心境になるまでにどのような心理の波があったか」などと質問したところ、中尉は重い口調でこう答えた。

「学鷲は一応インテリです。そう簡単に勝てるなどとは思っていません。しかし負けたとしても、そのあとはどうなるのです…….」
おわかりでしょう。われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながっていますよ。そう、民族の誇りに…….」ⁱⁱ

英霊の方々が命を懸けて護った「日本」とは、連続と続いてきたわが国の「歴史と伝統」だけでなく「故郷で暮らす親や家族」だけでもなく、「将来生まれ育ってゆく未来の日本民族」つまり、今を生きる我々のことでもある。しかし、残念ながら戦後の日本は、英霊の方々が護ろうとした「日本」の形とは少し違った形になってしまっている。占領軍の徹底した「民主化」によって教育から戦前、戦中の歴史は排除され悪とされてきた。結果として日本人の心は荒み、精神的な面での「日本人らしさ」、人と人の間で当たり前に存在していたはずの「絆」や「思いやり」が希薄になり、災害の際に助け合いが起きてようやくやくそれらの存在が再確認されるほどにまでなってしまうている。特攻隊に関しては、著名な歴史家が「日本の恥だ」とまで言う始末である。戦後の自虐史観の結果として、英霊を祀る靖国神社への参拝、ひいては英霊の慰霊顕彰という事にまでマイナスイメージが日本人の心には表れるようになってしまっている。

ただ、戦後70年が経つ今も慰霊祭が行われている地がある。

「万世」の地

国内の特攻基地として知覧の名は有名だ。だが、「万世飛行場」という名はあまり知られていない。報道班員も常駐しており、当時米軍の地図にも名が載っていた知覧とは違い、万世の知名度は高くない。万世は知覧と同じ鹿児島県内にある。知覧から二十キロ、本州の最南端薩摩半島にある日本三大砂丘の一つに数えられる吹上浜。戦後は北朝鮮の工作員による日本人拉致という痛ましい事件の起きたこの海岸に面する地に万世飛行場があった。この万世の地では毎年慰霊祭が開催され、戦後70年の今年4月の慰霊祭には、私も参加させていただくこととなった。だが、実はこの万世飛行場は戦後人々の眼前からも記憶からも完全に消えてなくなってしまうようになっていた。

戦局の雲行きが怪しくなってきた昭和18年夏から19年末に急造された万世飛行場は、昭和20年の3月末から7月まで使用されたが、その使用期間の短さに加え、当時特攻基地名は軍機密でも最大のものであり、公にされることもあまりなかった。知覧に比べて急造の万世飛行場の滑走路は短く、舗装もされていないもので使える機体が限られた。しかも万世は知覧とも近く、知覧のサブ飛行場のような存在であったため、満州や朝鮮で編成された特攻部隊の集結地は、司令部のある知覧と指定されたため、隊員達の日記や故郷への手紙などには知覧の文字が書かれ、事情を知らない遺族の方々はもちろん、軍の指揮系統の混乱などから生ずる変更を重ねる命令のため、知覧から万世へ移動し、そこから出撃したという事実は戦友たちにも伝わらず、万世で直接軍務に関わった者以外、ほとんどの人々は万世特攻隊のことを知らないままに終わってしまった。結果として「出撃地は知覧」とばかり思い込んでしまうこととなった。さらに、戦後には当時の責任者であった第66戦隊長の藤井少佐が自決をしたため、伝えられるべき記録も散逸することとなった。こういった状況から、戦後に出撃地が「知覧」だったとされ、知覧基地の知覧

特攻平和観音に合祀されていた万世特攻隊の方も少なくない。

この万世の基地は戦後注目されず、その存在を思い出されることもなく、永遠に人々の記憶から消え去ろうとしていた。なぜ、終戦から50年も後に生まれた私とその名前を知っているのか。

「至純の心」

戦後15年が経ち、滑走路は芋畑になり当時の面影もなくなった万世飛行場跡。そこを訪れた、万世特攻隊の生き残りがいた。苗村七郎という男だ。出撃の数日前に終戦を迎えた苗村氏は、「いつどこで、どのように散華したのかを知られることもなく、永遠に葬り去られようとする戦友たちの勇壮果敢な行動、純真な祖国愛、郷土愛をふと心の中に思い浮かべるとしても立ってもいられない寂寥感に襲われたのである」ⁱⁱⁱと、当時の想いを書き記している。特攻隊に遺骨はない。広い海のどこで散華されたかも詳しくはわからない。出撃は死を意味する特攻隊にとつての戦死の地は、すなわち出撃の地なのである。

そこから慰霊碑の建立を発心した苗村氏は、殆ど資料の残っていない万世飛行場について、生きのこった戦友や、遺書から遺族を訪ね、事実を探っていった。当時の復員局や旧陸軍省も万世については断片的な資料しか持ち合わせておらず、現地においても、そもそも万世から飛び立っていった人数さえ資料が全く分からなかったという。そのような状態の万世飛行場について、これを自力で、民間で一から調べていった苗村氏の努力は凄まじいものであった。

では、そのような活動を行った苗村氏の活動の根本理念ともいえるべきものはなんだったのか。それは、著書の題名にもなっている「至純の心を後世に」である。苗村氏が慰霊碑を建立し、遺品を収集して記念館を設立するまでに至ったその理由は、ただ一筋に国を思い、家族を思い、特攻という道を選んで散華していった戦友の、その「至純の心」を語り継ぎ、次なる世代がその思いに触れ、連なってもらうことであった。残念ながら苗村氏は数年前にお亡くなりになっており、私も直接お会いす

ることは叶わなかったが、その苗村氏の懸命な活動に胸打たれ、現在でも万世では苗村氏の「英霊の至純の心を伝える」という志を受け継ぎ、慰霊祭を護り続けている方々が多くおられる。私の大学の先輩方にもその様な方々がおられ、戦後大阪に生まれてきた生前の苗村氏から直接の薫陶を受けている。そうした人々を通して、私にも苗村氏の、後世に伝え残してゆきたい英霊の「心」が受け継がれ、そして私自身万世の地へと導かれることとなったのだ。

「特攻」と向き合う

今回、万世に行くにあたって、私にとつての「特攻」というものへの想いを一気に決定付ける出会いがあった。

初めて万世を訪れる、少し前の話になる。改めて先の大戦の歴史を振り返るため靖国神社の遊就館を訪問した時のことである。館内を巡っている中で一つの書に出会い、息を飲んだ。

「俺がやる 貴様も来い」

力強く、しかしシンプルに堂々と書かれたその書の言葉と、込められている想いに圧倒された。一体どなたの書であったのか。その書を調べると第62振武隊の一員として万世の地から飛び立ち、散華された富澤健児少尉の書き残した絶筆であった。「貴様も来い」。この一言に、自分の後に続いて特攻を行う者を信じて飛び立って行く、その覚悟が偲ばれる。多くの英霊の遺品が展示されている中で、万世の方の書に出会うというこの経験は、私には「運命」であると思えた。以来、私には「特攻」とはこの言葉に込められていると感じるようになった。

特攻を行う者には、自分に続いて援護する仲間が来るわけではない。最後は単機で、一人で敵艦へ突入する。「貴様も来い」、その後仲間が自分に続いてくれることを信じて突っ込んでゆく。この絶筆を遺された富澤少尉のご遺書の中にはこのような言葉がある。

「今の危機を救う者は私達です。この誇りをもって必ずやりやります。すでに戦友がやってあます。今の今でも私の戦友は、後に続くものを信

じてぶつかっているのです。黙ってゐられるでせうか、これが黙って見てゐられるでせうか。」【原文ママ】

この遺書に遺された言葉からも、絶筆に込められた想いが強く感じられる。私は、この「貴様も来い」という言葉が、現代の私に向かつて言っているかのように感じ取れた。我々後世の日本人が、この国を護り、故郷を、家族を護るために後継者を信じて散華された先人に続くどころか、貶めるとはなんとということだろうか。「私も先人に続かなければならない」。こう感じた時、彼らの心に私も連なつた。「私も行きます。この国を護り抜きます」と。

特攻という「生き方」

現代日本に於いて貶められ続ける特攻隊戦士たち。現代の歴史学とは、歴史を科学することが最先端となっている。それは私には歴史を「もの」として扱っているように感じられるのだ。単なる「出来事」である、と。だからこそ、特攻隊に対しては「無駄死にだった」で終わってしまう。だが、彼らの生命を懸けた「特攻」という歴史を、崇高な精神をただ単純に、無機物として扱ってよいのか。特攻隊に対する評価は、「軍国主義に操られ、大して戦果も挙げずに意味もなく死んだ」で終わりなのか。そうであつてはいけない。

「子犬を抱いた少年兵」という名で知られる写真がある。特攻隊員たちが、子犬を抱いて笑っているという写真だ。写真に写る荒木幸雄伍長は全国的に有名だろう。写真の中央で子犬を抱いている方である。この写真が撮られた場所と、彼らの出撃地は戦後長い間「知覧」であつたと認識されてしまつていた。だが、実際には「万世」の地で撮られたものであつた。この写真が撮られたのは、彼らの特攻出撃二時間前。写真の中で微笑む彼らは、二時間後には死んでいる身なのだ。核家族化が進み、家族の絆が希薄になつてきている現代の社会で育つてきた今の日本人に、危機に瀕する故郷や家族を護ろうと命がけで立ち上がった、あの「正義感」は今も存在しているだろうか。「平和と民主主義」をありがた

がり、教育から戦前の歴史を悪として排除してきた今の日本人の心には、自らが死ぬという極限状態においても、小さな子犬を抱いて笑える彼らのような本来の「優しさ」は溢れているだろうか。

歴史を学ぶことは「過去の事象に詳しくなること」だけではない。「先人の精神を感じ取る」ことでもあるのだ。歴史をただ単純な「もの」としてだけ扱つては、彼らの純粹に祖国を憂いた精神は、苗村氏が伝えようとした「至純の心」はどうなるのだ。何もなかったことにして終わりでよいのだろうか。

私にとって特攻隊とは何か。散華された英霊は「死んだ」のではない。彼らは「生きた」のだ。自らの生涯を「生き抜いた」のである。特攻散華された彼らの姿は、危機に直面した祖国を、故郷を、家族を守るために全力で「生きた」その一つの形なのだ。ただ純粹に祖国を守りたかつた、その一心であつたのだ。彼らの姿に映し出される「至純の心」とは、ただ一筋に「生きた」その姿であつた。

この一年、歴史を学びマバラカットの地に立つて、そして遺書や遺品、絶筆から伝わる英霊のその姿や想いを偲び、英霊がこの国のために全力で「生きた」姿を目の前に感じてきた。万世の地に立つ慰霊碑に真向かつた私に、70年前、私と同じような年齢で散華された英霊から『では、お前はどのように「生きる」のか?』と問われているような気がしてならなかつた。私は今年の6月に20歳になった。万世の地から飛び立ち散華された方々の年齢は現在の私とほとんど変わらない。それどころか荒木伍長や、伍長と共に写真に写る4人の方も皆17、8歳であり全員が私よりも年下である。70年前の日本に私がいいたら、私はどうなつていただろうか。現在の、英霊が護つてくださったこの平和な日本に生まれた私はどう「生き」ればよいのだろうか。

私の誓い

昭和47年、万世飛行場跡に慰霊碑の建立がされると、苗村氏たつての願ひであつた、万世飛行場から飛び立ち散華された201柱の英霊を慰

霊顕彰する慰霊祭が行われ、以降毎年続けられている。私は第44回目の今年4月に初めて慰霊祭に参加させていただき、式典内で「若者の誓い」として、慰霊碑の前で英霊に対しての自らの誓いを奏上させていただくという、光栄な機会をいただいた。

私が英霊に対して立てた「誓い」に於いて、英霊の方々からの問いに1つの答えを返すことが出来たと思っっている。最後に、その時慰霊碑の前で201柱のご英霊と苗村氏の御霊に対して奏上した言葉の一部をここで紹介させていただきたい。

『私は政治の道を志しています。特攻隊の皆様が護られた日本は戦後、「日本」としての形が大きく歪んだまま現在に至ってしまっています。政治という一つの路の中で、皆様の護ろうとした、美しい祖国を取り戻す。これが皆様の問いに対する私の答えです。国難に際して、日本のため、故郷のため、家族のために立ち上がった特攻隊の皆様が「生きた」姿、遺した言葉にも表されている、心優しく正義感あふれる日本人本来の精神（せいしん）を、現代の日本人の精神（こころ）に取り戻すこと。これを私は人生を懸けて、今の日本で全力で「生きて」ゆくなかでこれを達成することを皆さんにお誓いしたいと思います』

終わりに

今回の論文を執筆するにあたって、史実やご遺書の文などの多くを苗村七郎氏のご著書を参考にさせていただきました。万世の地に資料館や慰霊碑が設立され、戦後70年の今も慰霊顕彰が続けられ、私もその場に於いてご英霊の想いに触れることが出来ているのは、全く資料が遺っていない中、遺族や地元の方々を回り資料収集にご尽力された苗村氏のご功績によるものである。万世の地から飛び立ち散華された201柱のご英霊と苗村氏の御霊に感謝申し上げますと共に、その志を受け継ぎ、私も皆様が続いてゆくことを此処にお誓いさせていただきます。

参考図書

- ・苗村七郎 「至純の心を後世に」(ザ・メディアジョン)
- ・清武英利 「同期の桜」は唄わせない」(WAC)
- i 日本経済新聞 平成20年8月3日(マニラ闘魂西俊洋)
- ii 「なぜ特攻に志願したのか 西田高光中尉」
http://www.geocities.jp/kamikazes_site/tokko_episode/nishidacyul.html
- iii 苗村七郎 「至純の心を後世に」 p161-162 (ザ・メディアジョン)